
テレビ草創期のドラマに関する基礎的研究

A Preliminary Study of Teledramas in the Early Years of TV in Japan

飯塚恵理人 脇田泰子

はじめに

「神は細部に宿る」とはドイツの美術史家、アビ・モーリッツ・ヴァールブルク（Aby Moritz Warburg 1866-1929）が1925年、ハンブルク大学での初期ルネサンス期のイタリア美術に関するゼミナールにおいて行った発言で、講義録にも記録が残っている¹⁾。時は移って2017年夏、テレビ草創期から現代に至る様々なテレビドラマをテーマに早稲田大学演劇博物館で行われた「テレビの見る夢—大テレビドラマ博覧会」（2017年5月13日～8月6日）では、「ドラマの神様は細部に宿る」が関連イベントのタイトルになっていた。「日本のドラマの魅力は、ジェットコースターの如くにストーリーが目まぐるしく展開する海外のドラマとは異なり、むしろストーリーに回収されない細部にある」と、本企画展示を主催した同館館長で早稲田大学文化構想学部の岡室美奈子教授が、その命名の理由を語っている²⁾。確かにドラマと言え、むしろドラマチックさとは正反対に、何の変哲もない我が家の居間でぼそぼそと続く近しい者達との何気ない会話の中に横たわるような、日々の暮らしの本質を描き出すホームドラマと呼ばれるジャンルの作品が数多く思い浮かぶ。それは、庶民にとっ

て極めて身近なメディアとして戦後日本の娯楽を力強くけん引してきたテレビにとって、「ある、ある」と見ている者の共感を得ることが大きな使命だったからではないだろうか。

このように、日本のお茶の間を描く数々の名作を生んだドラマの魅力を培うことにもなるテレビ史は、1953年（昭和28年）2月1日の日本放送協会（以下、NHKと記す）によるテレビ本放送とともに始まった。しかし、厳密にテレビ初のドラマ放送と言うならば、実は1940年という戦前の実験放送期にまで遡ることになる。同じ1940年に開催が予定されていた「幻の東京オリンピック」に向け、日本の放送界が一丸となってテレビ放送の実現に力を注いでいた³⁾からだ。ところが、折からの日中戦争などの時局に鑑み、日本政府は開催2年前になってそのオリンピック開催権を返上してしまったのである。目前の目標を見失った放送関係者がそれでも夢を諦めず、せめて日本初のテレビドラマの実験放送にこぎつけた事実は近年、放送界以外でも知られるようになってきた⁴⁾。1940年4月13日放送の「夕餉前」（作・伊馬鶴平、後の伊馬春部）が正にそのドラマタイトルである。太平洋戦争末期には戦時電波研究所と名前を変えることになる東京・世田谷のNHK放送技術研究所のスタジオからこの日、実験放送の電波が二ヶ所に向けて送られた。ラジオ第一声からずっと放

送を行ってきた東京・芝の愛宕山に立つ東京中央放送局内に設けられたテレビ観覧所と、もう一つは同様に来るべきテレビ時代に先駆けて1938年に東京・内幸町に完成した放送会館だ。約12分間にわたって受信された内容は、タイトルが示すように嫁入り前の妹と兄、それに母の一家三人の夕食前の何気ない暮らしを描くというホームドラマだったのである。それは、これ以降、テレビ放送実現の夢とともに、日本社会から決定的に奪われていくことになる平和な日々への、制作者達のせめてもの愛着のメッセージではなかったか。茶筍筍や長火鉢などの簡単なセットに、豆腐屋のラッパの音や花瓶の割れる音などが効果音として使われていた⁵⁾。

この事実を除くと、日本のテレビ界では戦後の本放送開始数年後の1955年ごろから、単発ではない定時のドラマ放送が始まった。当時、このジャンルで異彩を放つ活躍を見せた局は、テレビ本放送の先陣を切ったNHKでも民間放送初のテレビ局である日本テレビでもなく、ラジオ東京テレビ(KRT、後のTBS)であった。1958年10月、100分間CM一切なしでの放送に踏み切った「私は貝になりたい」(本編約92分)と言えば、当時の作品のほとんどが残されていない中で、今なおDVDなどでも鑑賞可能な非常に貴重な映像作品でもある。日本のテレビ史に名を成す「ドラマのTBS」の礎はこの時代に築かれたと言っても過言ではない。このドラマの演出を手掛けた岡本愛彦ディレクター(1925-2004)は、もともとNHKの記者・ディレクター出身で、1957年にKRTに転じ、翌58年から『サンヨーテレビ劇場』(週1回45分ドラマ)というドラマの定時枠を担当するようになった。しかもこの時、上層部から命じられたのが芸術祭⁶⁾参加作品の制作であった。岡本は前年に日本でも公開され、話題を呼んだ映画「戦場にかける橋」(1957年・英米合作)などをヒントに、黒澤明監督(1910-1998)の「羅生門」(1950年)で脚本を手掛けた橋本忍(1918-)に戦争責任を

テーマにした作品を依頼して承諾を得た。C級戦犯として逮捕される元二等兵の主役に抜擢したフランキー堺(1929-1996)の熱演も然ることながら、送出面においても、まだテレビと言えば生放送だった時代に、本番組は前半約30分をVTRで収録し、後半を生放送するという画期的な手法により功績を残した。これにより、岡本は同年、第13回芸術祭賞を射止めた。KRTは、これ以後も『日真名氏飛び出す』や『東芝日曜劇場』といったシリーズもののドラマを立て続けに制作していく。同じ58年、NHKでは毎日同じ時刻に放送される、いわゆる「帯ドラマ」がスタートした。月曜日から金曜日まで午後7時のニュースに続いて15分間放送されたのが『バス通り裏』だ。まだ15才だった女優・十朱幸代のデビュー作となったこのホームドラマは、中原美紗緒とダーク・ダックスが歌う主題歌ともども大人気を博して一世を風靡した。1年という当初の予定が、最終的に5年間1395回の放送を重ねた。この成功が、後に朝の連続テレビ小説につながるモチーフを生み出していく。

劇場にも映画館にも行かずに自宅の茶の間で家族が揃って気軽に見られるという点で、夜8時台に放送されるドラマには、年齢・性別を超えて楽しめる娯楽性と、台詞や歌詞を聞いても誰ひとり眉をひそめることのない品位が求められていた。しかも、それは放送時間内に収まる必要があった。さらに場面転換を円滑に行い、番組の区切りを明確にするため、オープニングやエンディングなどの必要な時間に応じた「放送音楽」が作曲され、それぞれの音楽ジャンルの質と担い手を変えるなどしながら、ドラマ全体として「放送文化」という戦後の重要なメディア文化の一部を形成していくことになる。

筆者らはこれまでテレビドラマにおける演出方法の特長等について研究を行ってきた⁷⁾が⁸⁾、今回2017年3月から5月にかけて「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」に参加し、NHK

制作による初期のテレビドラマ「五文叩き」(1956年)と「居留地ランプ」(1954年)を視聴する機会を得た。また、その構成表から「五文叩き」の静止画10枚と、「居留地ランプ」の静止画6枚のデータを得た。これら2本の視聴番組と静止画データを基に、関連する新聞記事などを参考資料として、草創期のテレビドラマの表現方法について考えたい。

1) 草創期テレビドラマの表現①「五文叩き」

1956年2月2日20:00～21:10放送

(原作:長谷川伸、脚本:西川清之、音楽:清瀬保二、主演:田崎潤)

放送当日の朝日新聞ラジオ・テレビ欄⁹⁾に、本放送の紹介として「長谷川伸原作『五文叩き』を西川清之の脚色、演出永山弘で1時間10分にわたって送る。これは徳川末期の浪人武芸者が貧困の中にも明朗さを失わない生活を描くもので、いわゆる剣豪を風刺した喜劇風ドラマ。出演は田崎潤、伊達信、及川武夫 細川ちか子、藤山竜一西川敬三郎ほか。装置島公靖、効果岩淵東洋男。」とあり、「貧困の中にも明朗さを失わない」武芸者を主役として「喜劇風」のドラマにしたと書かれている。一般的にテレビ欄の番組紹介はその放送局の広報部から番組宣伝のために新聞社に提供された記事を基に書かれると考えられる。すなわ

ち制作した放送局が、上記のようにこのドラマを捉えていたということになる。この記事と静止画を照らし合わせ、静止画から読み取れる工夫について述べたい。静止画は特徴的な4場面を取り上げた。

静止画1 中央の浪士が「五文叩き」。その右に老道場主、左にその老妻。二人は、五文叩きに窮乏して死ぬ覚悟をしていることを嘆く。着物に破れを作り、障子に穴があることによって道場の荒廃が表現されている。五文叩きも紋の付いた小袖と袴をつけて武士と分かる服装ではあるが、髷を結わない歌舞伎の浪人の鬘を用いていかにも永の浪人といった風体である。この静止画の場面は、ドラマでは前半の「愁嘆場」にあたり、息子が修行に出たまま戻らないため、その許嫁の庄屋の娘が米を届けてくれるのも断り、道場主が娘に他に縁付くように勧め、自分達は潔く死のうと言う場面である。この五文叩きも空腹で倒れそうな状態でこの道場に食を求めてきているのであり、その意味ではこの老夫婦と境遇は変わらないのだが、老夫婦に死ぬのを思いとどまるように説得する。

静止画2 五文叩きと「道場破り」。道場破りはたすき掛けで仕事をしている(刀を抜ける状態である)ことを示し、小袖を着て袴をつけているので武士である。髭で無頼を表現している。後ろの村人達は飴売り・百姓など多種の職業を髷で表



静止画1 「五文叩き」より



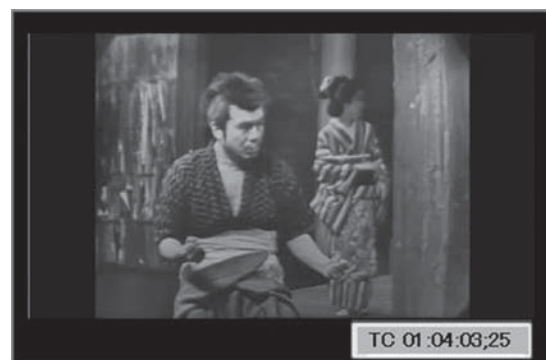
静止画2 「五文叩き」より

現している。この道場破りは番組開始20分ごろにも、この道場を手に入れようと登場している。その時には「弟子のいない状態ではしかたない」と出て行ってしまった。彼は、腕は立たないものの口がうまく、おだてた弟子に繁盛な道場を破らせて、番組開始39分前後にこれを手に入れている。しかし弟子達が五文を払うと叩かせてくれる「五文叩き先生」のいる道場へ行ってしまったので、腹を立てて再び道場破りに来たのであった。この静止画にある道場破りの扮装は当時のテレビドラマの描いた「武芸」に自信のある強そうな男の姿として捉えられるだろう。

静止画3 五文叩きに打ち据えられた道場破り。村人に女や子供が入っている点が2の構図と異なる。村人は、本当は強いのに五文払えば叩か



静止画3 「五文叩き」より



静止画4 「五文叩き」より

せてくれる五文叩きを歓迎し、「武芸」を看板にしながら彼に負けた道場破りを冷たく見ている。老若男女の役者がその時代の様々な職種の服装で映っている。視聴者は自分と同じ性別、近い身分の人を見つけることが出来、自分も劇中のその場面に立ち会っているような気分が味わえ、感情移入できるようになっている。これは家族が茶の間で見ることを意識したドラマの一工夫であろう。

静止画4 五文叩きが、逃げ出した恐ろしい熊を檻に誘導して戻し、村に平和が戻った場面。右に立つのは、道場主の息子の元許嫁である庄屋の娘おさきである。行方不明の道場主の息子に代わり、五文叩きがおさきと結婚してこの道場を継ぎ、道場主夫婦に孝養を尽くすことを予見させる終わり方となっている。家族揃って楽しめる娯楽には欠かせないハッピーエンドになる構成と考えてよいだろう。祭り囃子をバックに用いて村の人々の質朴な楽しみを表現する点は、テレビが「絵のあるラジオ」として「聴く楽しみ」にも留意する音楽上の工夫と考えられる。

2) 草創期テレビドラマの表現②「居留地ランプ」

1954年11月3日19:30～20:15放送

(原作：長谷川伸、脚色：西川清之、音楽：平井康三郎、出演：山形勲・久松保夫他)

放送当日の朝日新聞ラジオ・テレビ欄¹⁰⁾には「芸術祭参加劇『居留地ランプ』山形勲他」としか紹介されていない。確かにテレビドラマ初の芸術祭参加作品であるが、ドラマの見どころについての解説もなく、扱いは軽い。以下、ストーリーに従って静止画場面を分析していく。

二人の若者が水戸藩を脱藩して掛川の親分のところに駆け込んだ。しかし喧嘩があると言うので逃げ出し、江戸の幕府が薩摩藩との戦いに備えて人を集めていると聞いて雇ってもらおうと江戸に向かう途中のことである。

静止画5 横浜の本牧道で不思議な音が聞こえ、不思議な落とし物(西洋の帽子)を見て二人



静止画5 「居留地ランプ」より



静止画6 「居留地ランプ」より

が驚いている場面。向かって右側はドラマの中で「先生」と呼ばれ、破れてはいるが羽織を着ているので元はそれなりの生活をしていたという設定である。ドラマの中では武士であったと台詞で言われているがそれにふさわしい設定。向かって左は上着なしの一重の着物で袖がない（取れてしまった？）ことから武士の家来格か、もしくは百姓、肉体労働者という設定である。空腹で怖がりだが、虚勢は張りたいユーモラスな人物像で、戦後10年近くなって平和を実感した世代の大人も若者も共感しやすかったのではないかな。

三枚目的な言動の主人公達が歩く道はすべてスタジオ内のセットであったと考えられるが、道幅を狭めて周囲に樹木を配置することにより、横浜から江戸まで続く本牧道が強盗の出るような寂しい道であることを表現している。映画のセットのような華麗さはないが、映像で「寂寞」を感じさせる仕掛けであり、強盗が出る前半の山場に続く序の場となっている。

静止画6 強盗浪士に護身用のピストルを奪われ、外国人貿易商の日本人妻が逃げてきて倒れる。髪型が江戸時代の日本人女性と異なり、黒のコート風の上着を着ていることで居留地らしさを出し、イヤリングをつけることで裕福であることを表現している。主人公が強盗浪士と戦う前半の山場となる発端のシーン。か弱い異装の女性に視聴



静止画7 「居留地ランプ」より

者の目が釘付けになるよう工夫されている。

静止画7 貿易商の妻から奪ったピストルを主人公達に構える強盗浪士。浪士の月代が伸びているところに髷の形が残っており、元は水戸藩士だったという設定。袴風の上着にも家紋が入っている。また着物にも破れや汚れがなく、窮乏して強盗をしているという設定ではない。悪役としては、歌舞伎ならば二枚目の白悪の系統に属する設定。ピストルの弾を使い果たして二人に縛られることになるが、その場面はシーンとしては描かれておらず、捕縛に向かう登場人物の台詞で示される。これはこの浪士が「かっこいい悪役」に属するゆえの工夫だろう。

静止画8 強盗浪士から救ってもらったお礼と

して貿易商の家でごちそうになる二人。貿易商の妻は西洋風の衣装で居留地らしさを出している。家の中にも複数のランプがぶら下がり（これが番組タイトルの由来か）、重厚な窓、観葉植物らしきものも見え、裕福でモダンな住居である。冒頭、飢えた二人はうな井と味噌汁が欲しいと台詞では言うが、セットにはおにぎりとその右側に洋風のつまみがある。二人は大きなおにぎりを喜んで食べるが、洋風つまみには驚いて珍しがっても余り箸をつけない。二人の田舎者振りがよく分かる演出である。強盗に襲われる緊張した場面が続く息抜きの場面の小道具として、この大きなおにぎりが、茶の間で視聴する一般家庭の家族にも共感的に受け入れられる演出となっている。

静止画9 二人はワインのコルクを開けるよう



静止画8 「居留地ランプ」より



静止画9 「居留地ランプ」より



静止画10 「居留地ランプ」より

勧められるが出来ず、見慣れないものばかりで驚いている。すると彼らの後ろに、特有のアクセントのある日本語を話す貿易商の女召使が現れる。彼女は中国風の服を着ており、居留地の日本人貿易商の召使である中国人という設定を想起させる。彼女は二人に話しかけるが、外国なまりの強い日本語であるため、二人には理解できない。欧米人の夫は登場させず、中国服を着た召使を出して居留地の貿易商の家の雰囲気を出す点に加え、登場人物を必要最小限に抑えることにより視聴者の注目を主役の二人の浪人と助けられた女性以外に分散させない工夫が見られる。

静止画10 ピアノが奏でる「ねんねんころり」の子守唄を聞きながら、望郷の念を募らせる二人。ランプもある居留地らしく明治の文明開化にふさわしい地区をセットで表現している。流行の最先端の暮らしに触れた二人だが、やはりこれまでの慣れた生活が良いという結末になっている。テレビドラマにおいて「故郷」を感じさせる音として子守唄が使われたハシリであろう。「虚構のリアル」を目指すテレビドラマであっても象徴劇に通う「らしさ」を目指す演出が、音楽やセットを用いてなされている点が興味深い。

3) まとめ

テレビの草創期においては、ドラマと言っても

まだラジオ番組が主体で、他のジャンルも含め、番組宣伝も依然としてラジオに重点がおかれていた。「テレビの番組なんて作ったって賢くならんゾ。」テレビ放送が始まった当初のNHKでは、よくこのように言われていた。テレビが「ラジオと互角だと思われるようになったのは55年ぐらいでは」と1953年、つまりテレビ元年にNHKに入局し、初期ドキュメンタリー『日本の素顔』(1957年～)などを制作後、ドラマに転向して大河ドラマ「太閤記」(1965年)などの演出を手掛けた故・吉田直哉(1931-2008)も証言する¹¹⁾。「五文叩き」、「居留地ランプ」の二作とも、まだその時代に作られたテレビドラマであるが、すでに演出の基礎には「虚構」を視聴者にリアルに見せるという意図がある。また衣装、スタジオセット、化粧などにも「らしさ」を表現するという象徴劇に通じる工夫がなされている点が注目に値する。狭いスタジオに複数のカメラを入れて同時に撮影するという制作上の制約を受けながらも、そこに映し出される映像において「山道」「貿易商の家」などを「それらしく」見えるように作り込んでいる。

テレビドラマには舞台演劇とは異なる「らしさ」が要求され、はでに破れた着物を着た貧困の武士であっても、顔や身体はつやつやと元気そうであるなど「細かいところもよく見える映像としてそれらしく美しく」表現している。ドラマで流れる子守唄も本来ならばあるべき水戸訛りがない標準語で、幕末の水戸の人間が仮に聞いても懐かしく感じられるものであるかどうかは疑問だが、このドラマを見たであろう当時の世代の多くの人が聴き覚えていて懐かしさを覚える子守唄が選曲されているものと考えられる。テレビドラマは演劇史の上では舞台演劇とは異なる映像・音としての「らしさ」を「美術」や「音楽」スタッフの知恵を総動員して作り出されたものであり、これをまとめるうえで、テレビ局の社員にせよ、外部の専門職にせよ、「演出」を手掛けるディレクターの個性がドラマごとに色濃く出ているものと思われる。

それは、「私は貝になりたい」の演出家・岡本愛彦にしても然り、である。

今回、NHK番組アーカイブス学術トライアルに参加し、草創期のテレビドラマ「居留地ランプ」、「五文叩き」など5作品を視聴した。草創期のテレビドラマは、観客層を想定して作る映画とは異なり、様々な世代の家族が茶の間で揃って鑑賞するという点で、当初から「絵の付いたラジオ」を志向していたのではないかと考えられる。フィルム編集技術は当時、今ほど確立していなかったため、映画フィルムで撮影したごく短時間の分だけを挟み込むことは可能だったが、基本的にはスタジオで役者の演技を複数のカメラで撮影し、演出家の指示を受けたスイッチャーがその複数の映像を適時切り替えることにより、場面編集が成されると同時にそのまま生放送される仕組みで対応したのである。これにより生ならではの緊張感は保ちつつも、万一「放送にふさわしくない絵柄」が撮影されてしまった場合にも、他のカメラ映像に切り替えて放送し、事なきを得るという方策を取れるようになった。ドラマにも生放送を強いた当時の技術的制約と制作環境が、結果として老若男女が安心して視聴できるドラマ作りの土台となっていたのかもしれない。

日本の放送界がアーカイブという概念を持ち、自社の映像や音源などをそれぞれの時代を映し出す貴重な記録であると認識し、これを公共の財産として後世の代まで広く伝えていこうという考えに立ち至ったのは、残念ながら21世紀に入ってからでしかない¹²⁾。この動きは諸外国に比べても非常に遅い¹³⁾。よって、本論が対象とするテレビ草創期、つまり1960年代以前のドラマについては、記録どころか作品そのものがもはや存在しなかったり、不明点が多過ぎたりする場合が非常に多い。当時は生放送しかなかったため、放送とともに映像は消えた。VTRを使用したケースでもVTR自体が高価であったため、これを何度も繰り返し用いることにより、それ以前に収録されて

いた番組は全て消えた¹⁴⁾。制作者もそれが当たり前だという認識に立ち、記録して残そうという発想すら持っていなかった¹⁵⁾。加えて放送台本など紙媒体の関連資料も、関係者個人の寄贈などにより散発的に残されているだけである。

このような状況下にある1954年、1956年というテレビ草創期の希少なドラマ作品を視聴することが出来たのは、NHK番組アーカイブス学術利用トライアルならではの機会に恵まれたからである。さらに指摘するならば、これだけ映像が少ない時代の番組であればこそ、尚のこと映像の欠損を補う貴重な情報たりうる台本などの関連資料についても、今後できる限り積極的に公開を図る方向性が求められているのではないか。権利上の問題が発生し得ることを考慮しても、これらの補完資料が、文化的、学術的なアプローチによりテレビ番組に光を当てる数少ない好機に、今は幻となってしまった作品の理解と研究においても大きな力となることだけは間違いないところである。放送研究の支えや裏付けとなるこれらの資料もまた、番組と同様に公共の財産であるという見地に立ち、NHK・民放を問わず放送業界が横断的に一つになり、さらに公開を進める形で改善を図っていくことを望んでやまない。ドラマを含めてかくも「神は細部に宿る」ものである以上、それは放送開始100年をまもなく迎える21世紀社会にとっても大きな文化的課題なのである。

補記

本研究は2017年度第1回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルによる成果の一部となります。また平成29年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」(研究代表者：飯塚恵理人、課題番号：17K02432)による成果の一部となります。記して感謝申し上げます。

注

- 1) <https://www.fink.de/katalog/titel/978-3-7705-3704-4.html> (最終閲覧日2017年10月2日)
http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000080409 (最終閲覧日2017年10月3日)
- 2) ヨミウリ・オンライン「テレビの見る夢—大テレビドラマ博覧会開催にあたって」<http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/170510.html> (最終閲覧日10月1日)
- 3) 1940年東京オリンピックの前大会である1936年ベルリンオリンピックでは、ナチスドイツがその英知を懸け、ベルリン市内のみという狭い範囲ではあったがテレビ生中継を世界で初めて成功させた。この時、日本は初のラジオ生中継を実現させ、女子200m平泳ぎ決勝で前畑秀子選手(相山女子専門学校卒)が日本人女性初の金メダルを獲得。レースを実況したNHK河西三省アナウンサーの「前畑がんばれ!」の連呼が、ラジオを通じて真夜中の日本列島に響きわたった。
- 4) 森田創「紀元2600年のテレビドラマ」講談社、2016年、P.163
- 5) 日本放送協会「20世紀放送史・上」2001年、P.138
- 6) 「文化庁(当時は文部省。文化庁は68年から)芸術祭は、広く一般に優れた芸術の鑑賞の機会を提供するとともに、芸術の創造とその発展を図り、もって我が国芸術文化の振興に資することを目的として昭和21年以来毎年秋に開催される芸術の祭典です。」(かっこ内は筆者注)文化庁HP <http://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsusai/> (最終閲覧日2017年10月8日)
敗戦による国民の精神的なダメージをいやす目的で1946年に始まり、当初は演劇、音楽、舞踊、能楽の4部門だったが、テレビ本放送開始の翌54年にテレビ部門が新設された。
- 7) 村上正樹・飯塚恵理人「『名古屋芸能文化としてのテレビ局草創期ドラマ制作』の基礎的研究～中部日本放送草創期のテレビドラマ「演出家・伊藤松朗」の仕事～」名古屋芸能文化会「名古屋芸能文化」第26号、P.81-90、2016年12月発行
- 8) 村上正樹・飯塚恵理人「『名古屋芸能文化としてのテレビ局草創期ドラマ制作』の基礎的研究～中部日本放送草創期のテレビドラマ「演出家・大脇明」の仕事～」名古屋郷土文化会、「郷土文化」第72巻第1号、P.85-92、2017年8月発行
- 9) 1956年2月2日付 朝日新聞朝刊 12版5面ラジオ・テレビ欄
- 10) 1954年11月3日付 朝日新聞朝刊 12版5面ラジオ・テレビ欄
- 11) 注5 P.378
- 12) NHKアーカイブスは、NHKテレビ放送開始50周年記念事業として2003年2月1日に開設された。
- 13) たとえばフランスの視聴覚アーカイブ・センターであるINA (Institut National de l'Audiovisuel、国立視聴覚研究所)は1974年設立、翌75年に事業を開始し、現在は世界最大規模のデジタル映像データバンク。フランスのテレビ・ラジオ番組の収集・保護・デジタル化・復元とともに、アーカイブからの配給・配信も行う。対象は過去60年間のラジオ番組と50年間のテレビ番組で、収蔵

点数はおおよそ300万時間という圧倒的な数字を誇る。

- 14) 「ラジオ放送が開始されたのは、1925年（大正14年）、その後1953年（昭和28年）にはテレビの本放送が始まりました。放送が開始された当初は生放送でした。その後、記録媒体（テープ）が開発されましたが、貴重だったため繰り返し使われていたことから、放送開始初期の番組で現在残っているものはほとんどありません。近年、過去に放送された番組がDVDなどで復刻発売されるケースが増えています。」

https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-442.php
国会図書館リサーチナビの「放送番組（テレビ・ラジオ番組）〔録音・映像資料〕」の項の説明文。（最終閲覧日2017年10月8日）

- 15) 数少ない例外は前出の「私は貝になりたい」で、制作された58年に日本国内に導入されたばかりの2インチVTRで番組の全編が記録されていた（よって現在もDVD版等で視聴可能である）。また、岡本・橋本コンビは翌59年にも同じ『サンヨーテレビ劇場』で放送された「いろはにほへと」で2年連続の芸術祭賞を受賞した。この作品の映像も当時のものとしては非常に例外的にTBSに保存・保管されている。

いいづか・えりと / 文化情報学部教授

E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp

わきた・やすこ / 文化情報学部教授

E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp